

真の知識は、言葉、つまり読書によって蓄積されていくと信じています。息子に漢字教育をした動機もそこにありました。小さい頃から将来は宇宙ロケットの研究をやりたいと言っていました。それをするにしても一番大事なことは読書であると思っていましたので、本を読む力をつけてやったのです。

「ぼくがどんどん歩いていくと、お山が逃げていくよ。ぼくは強いんだな」

これは息子が二、三歳のときに言った言葉です。山が逃げて行く？ おかしいこと言うと思いました。ところが実際に山のほうへ一歩進むと山が後退したように見えるのです。

私たち大人は山が動くなどということはまったく考えませんが、子どもにはこういう素晴らしい観察力があることを知ったのです。経験が豊かになって、表現したいものが頭の中に渦巻いている、幼児期とはそういう時期なのです。

息子は中学から慶応の普連部に入り慶応大学に進みましたが、慶応高校で三年生になったとき、進路で意見が分かれました。妻は医学部へ入れたかったようですが、息子は工学部に行きたいというのです。小

学校の時からそういう方面の本ばかり読んでいましたから、ずっと工学部へ進むと決めていたようです。

それで妻に「一生のことを親の希望で決めちゃいけない。本当にやりたいことをやらせてやろう」と言って、工学部に行かせました。ロケットの研究をすると企業から奨学金がもらえるということで、それをもらって勉強しました。

親としていろいろ忠告するのはいいことだけれども、最終的には子ども自身に決めさせるべきだと思うのです。自立して育った子どもは、自分の道をしっかり見つめていますから心配することはないのです。

私は自分の息子に幼児から漢字教育をして、読書力をつけてやったことがよかったと確信していますから、自信をもってお勤めできるのです。これは、実体験に基づいていることなのです。